

論文の内容の要旨

論文題目 場面描写談話における話者の視点
-日韓両言語の表現構造と其中間言語への影響について-

金 慶珠

本論文は、日本語および韓国語の談話構成における「話者の視点設定とその言語表現への反映のあり方」の比較対照を通じて、同一の言語外事実をとらえる話者の視点には言語間の相違が認められるのか、また、仮に一定の相違が認められる場合、それが学習者の中間言語にはどのような影響を及ぼしているのかについて考察・検証を行ったものである。一般的に「視点」とは、話者が目撃する状況の中から、何に注目し、それをどのように言語化するのかを意味する「情報のとらえ方」として広く用いられる用語であるが、中でもKuno, S. (1972) に始まる一連の研究は、従来の統語法規則では説明することのできなかつた談話上の制約を、視点という概念に基づいて分析し、「話者の主観（共感）」が発話に反映される仕組みを体系的にとらえた理論として、これまでの日本語および韓国語の談話研究に大きな影響を与え続けている。こうした中、学習者の言語運用における視点の問題についても、久野(1978)によって提示された談話法規則に基づく実証分析が日本語教育の分野を中心に行われており、日本語話者の視点設定における傾向的特徴が提示されると同時に、他言語話者や他言語を母語とする日本語学習者の視点は、日本語話者のそれとは異なる傾向を示しているとの指摘が行われている。こうした先行研究における考察の結果は、日本語話者の言語運用においては、「受身の多用により、主語が指示する関与者の変動率が他言語話者や日本語学習者に比べて相対的に低い」という現象の提示に集約されよう。しかしながら、従来の先行研究における視点分析の観点は、談話構成における「主語の設定」と「視点の設定」を同一視しながら、「発話の統語的形式上の相違」を直に「話者の視点の相違」と見なすことによって、日本語話者と他言語話者の間に見出される「主語の一貫性」における相違をも、話者の「談話構成における視点の一貫性」における相違として解釈し、結果的には、言語の相違により、「談話の結束性」にも差が生じるという結論を導いている。

こうした状況において本論文では、従来の先行研究に対する理論的考察を通じて「発話における統語的形式」と「話者の視点の設定法」との間には直接的な対応関係が認められないことを指摘しながら、「話者の視点が発話に反映される仕組み」に対する考察を通じて、日本語および韓国語に共通する「視点の表現構造」を具体化させると共に、その表現構造の選択のあり方を比較対照の基準とすることの妥当性について検討を行った。具体的には、

発話における話者の視点には、話者が目撃する場面の中から「どの関与者を中心に発話を構成するのか」を意味する〈注視点〉と、話者の場面をとらえる主観的立場としての〈視座〉という二つの構成要素が想定されることを指摘し、久野(1978)の視点分析における理論的枠組みを言語運用に基づく実証分析に応用する上での新たな解釈法を提示した。さらに本論文では、〈注視点〉と〈視座〉という二つの要素が「話者の事態への関与のあり方」に基づいて変動する仕組みを具体化させながら、こうした仕組みに基づく視点構造が、異なる言語話者の視点運用のあり方をとらえる上での共通の基準として機能する現象を指摘した。

次に、以上の理論的枠組みに基づいて本論文では、日本語話者(JJ)および韓国語話者(KK)による「場面描写談話」を分析の資料としながら、話者の視点の設定法には言語の相違により異なる傾向が認められるのかについての実証分析を行った。分析の結果、JJおよびKKの談話資料には、従来において指摘されてきた「主語の一貫性における相違」が認められたものの、こうした表層構造上の相違は、話者の注目対象としての〈注視点〉相違に過ぎず、話者の主観的立場を意味する〈視座〉の設定頻度およびその設定対象においては、JJおよびKKの間に差は認められないとの結果を得た。しかしながら、JJとKKにおける〈視座〉の言語表現への反映のあり方、すなわち、その表現法においては一定の相違が認められ、JJにおいては「受身の多用により、文の主語に設定される傾向」が相対的に高い反面、KKにおいては「直示表現の多用により、主語以外の文中または文外要素」に話者の〈視座〉が設定される傾向がJJよりも高いことが検証された。したがって、従来において指摘されてきた日本語話者の談話構成における「同一主語の相対的多用(主語の一貫性)」も、「視点の一貫性」における顕著さではなく、話者の視点の一貫性を保つための「表現法(ストラテジー)における傾向的特徴」として解釈されるべき現象であり、言語の相違により、その傾向は異なり得るとの結論を得た。

次いで第二言語習得の観点から、学習者の母語と目標言語間の異なる視点の表現法が、その中間言語に転移として影響するのかについて検証するため、韓国人日本語学習者(KJ)および日本人韓国語学習者(JK)の談話資料に対する二方向からの対照分析を行った。その結果、KJとその母語である韓国語話者(KK)との間には〈注視点〉の設定における「行為主体主語」の多用が類似性として認められたが、同様の傾向がJKの談話資料にも認められたことから、本研究ではこれを学習者の母語からの「視点の転移」であると見なすことは困難であるとの結論を得た。しかし、学習者の〈視座〉においては、その設定頻度がJJやKKより有意に低くなっていたものの、上位の被験者群である「中上級学習者」においては、KJ・JK共にそれぞれの母語話者と類似した表現構造を呈することから、学習者の熟達度が上がるに連れ、〈視座〉の設定頻度が高まると同時に、その表現法においても母語に類似する傾向が認められるとの結論を得た。